

【研究活動報告】

地域への関心を惹く小学生向けの学習教材の創出

—低迷する観光事業の復活をテーマとした観光副読本づくり

大 下 茂
大 森 哲 至

【研究活動報告】

地域への関心を惹く小学生向けの学習教材の創出

—低迷する観光事業の復活をテーマとした観光副読本づくり

大 下 茂・大 森 哲 至

はじめに（研究の概要と取り組みに至った背景・経緯）

それぞれの地域には他の地域にはない独自の魅力がたくさんある。本研究の対象とする三宅島は東京都に属する伊豆諸島の島である。三宅島は火山島であり、これまで数多くの噴火を経験してきた。なかでも2000年に起こった噴火では三宅島住民の生活を一変させるものとなった。このときの噴火の際に発生した火山ガスから身を守るため、三宅島住民は4年5ヵ月におよぶ全島避難を余儀なくされた。避難生活は2005年に解除され、三宅島住民は三宅島に復帰することができた。しかし復帰できた三宅島では火山ガスの放出が継続し、島の自然に多大な被害をもたらすなど噴火前とはまったく異なる様相を呈していた。

火山ガスの放出は2005年の避難解除後も10年以上にわたって住民の生活再建にも困難をもたらした。特に2000年噴火以降の三宅島では若い世代の島離れが急速に進み、災害を契機とした過疎化・高齢化の問題は非常に深刻になっている。このような背景には火山ガスに対する健康不安だけでなく、火山ガスの被害によって島の主要な産業である農業や観光業への深刻な被害の実情、さらには今後の生活に見通しを持てない不安なども影響していることが推察される。

筆者らは2000年三宅島噴火以降、10年以上にわたり三宅島住民の精神健康調査や生活再建状況調査、意識調査などを縦断的に実施してきた（大森, 2010; Omori・Fujimori, 2010; 大森・藤森, 2011; Omori, 2012 a, b;

Fujimori・Omori, 2012; 大森, 2019; 大森・田宮, 2020; 大森・田宮・岩井, 2020; 大森, 2021)。上記の一連の研究結果では2000年噴火から20年以上が経過する時点でも住民の半数以上(51.3%)に精神的悪化の疑いのあるハイリスク者が認められている。また上記の結果ではこのような住民の精神健康の回復が見られない要因として、住民は火山ガスの被害が継続するなかで生活再建を強いられており、そのなかで住民の多くが日常のなかで何か打ちこめるような趣味や生きがいを喪失し、将来に対する希望をもてないことなどが関係していることを明らかにしている(大森・田宮・岩井, 2019; 大森, 2021)。このように2000年三宅島噴火の被災者の精神健康の問題は依然として深刻な問題を抱えており、現状の課題として被災者の精神健康の回復に寄与するような支援策が求められている。

筆者らは研究成果を三宅村役場にフィードバックしていくなかで、住民が生きがいや将来に対する希望をもてるようになるには具体的にどのような支援策を検討していくのがよいのかについて三宅村役場とともに協議を続けてきた。

三宅島では避難解除後の2005年5月より観光客の受け入れを開始し、「火山との共生」とする島づくりの基本方針のもとに観光事業の推進に力を入れている。しかしその基本方針のもとに地域固有の観光資源を生かした新しい観光商品を創出し、訴求しているものの、2000年噴火以降の来訪者数は噴火前の半分以下にとどまっている。

そのようななか近年、三宅島を取り巻く状況は大きく変化している。火山ガスの放出は減少し、被害も少なくなっている。また自然も回復し、野鳥なども戻ってくるようになっている。三宅島の近況は、2000年噴火から長い時間を経てようやく観光事業の回復と発展という新たな展開に入ることになった。

したがって三宅村役場との協議においても島の状況変化にともない、第5次三宅村総合計画に示されている基本方針を重視し、島の主要な産業である観光事業を盛り上げていくことにより、住民の生きがいの創出や将来

への希望につなげていくことができるような新たなアプローチからの支援策を検討していくことになった。その先駆的な取り組みとして、都下の区市町村のモデルとなるべく持続可能な三宅島の地域活力向上グランドデザインを描くことを最終目標とし、その基礎調査として三宅島でのインタビュー調査や既往文献調査等をもとに、地域をより深く知るための観光読本としてまとめた『三宅島観光白書 三宅島学』(大下・大森, 2020)を発行した(図1を参照)。

この『三宅島観光白書 三宅島学』の発行において、筆者らが重視したのは次の2点であった(大森・大下, 2021(印刷中))。ひとつは三宅島の被災者のような継続する災害下の被災者にとっての支援策においては行政の支援や心のケア活動だけでなく、被災者に打ちこめるものや生きがいを提示したり、また将来に対する期待や希望を提示することができるような支援策を提示することであった。すなわちこれまでの筆者らによる調査・分析結果を踏まえ、三宅島の魅力的な観光推進につながる5つの特徴、①エコツーリズム、②アースデザイン、③シビックプライド、④危機管理、⑤完結と連携という三宅島独自の観光政策の可能性を提示することで地域の観光活性化をもたらし、住民に日常における生きがいの創出や将来に対する期待や希望をもってもらえることを重視した。

もうひとつは地域の活性化を目指すには次世代を担う子どもたちが地域の魅力について再確認し、「三宅島の自然や文化を守っていききたい」「三宅島の素晴らしさを



図1 三宅島観光白書 三宅島学の表紙

「どんどんアピールしていきたい」など三宅島の魅力について子どもたちが知ることの重要性である。それぞれの地域には他の地域にはない独自の魅力がたくさんある。地域の活力を持続的に向上させるには、その魅力に対してさらに磨きををかけていくが必要になる。すなわち地域のなかで当たり前に存在していることでも地域の外から見るとお宝が眠っている場合もある。これまでその地域で培ってきた人々の日常の積み重ね（歴史や経験）が地域の記憶をつくり上げる。同時に地域の記憶をまちづくりに活かすことが地域の成熟には欠かせないのである。それを継続していくには時代や社会の変化はあっても地域の記憶をまもり、次の世代につなげていくことが重要になる。したがって『三宅島観光白書 三宅島学』の作成においては、次世代の三宅島を担っていく三宅島の子どもたちにも自らの地域の魅力や可能性を知り、それらを自らの力で維持・発展できるようになってもらえることを重視した。

以上のような筆者らによる『三宅島観光白書 三宅島学』の発行への取り組みにおいては、観光は地域に経済的な効果をもたらすことが期待されるだけでなく、地域での働く場づくり、環境や景観づくり、伝統文化の継承、子どものふるさと意識を高めるなど、魅力ある島づくりの目標になることを期待している。

一方で『三宅島観光白書 三宅島学』の発刊における課題として、次のようなことがあげられる。本書の対象は中学生・高校生以上を対象にしている点である。というのは、今後持続可能な三宅島の地域活力向上グランドデザインを描いていくプロセスを推進していく上では、長期的なビジョンで取り組んでいくことは必要不可欠である。同時に長期的なビジョンという点を考慮すると幼少時から三宅島の子どもたちに対して、三宅島の素敵な魅力を伝え、三宅島で生まれ育ったことを誇りに思えるようなきっかけづくりを提供することも重要であると考えた。そしてそれら取り組みの成果物としてまとめたものが2021年2月に発行した『私が知りたい三宅島観光 みんなに知ってほしい三宅島観光』（大下・大森、2021）である

（図2を参照）。したがって本稿では『私が知りたい三宅島観光 みんなに知ってほしい三宅島観光』の特徴を踏まえながら、被災地における子どもたちの地域に対する期待や希望を育むことができるような被災者支援における新たなアプローチの可能性について考察することを目的とする。

副読本の役割・位置づけと三宅島の副読本

学校教育法の第4章小学校の第34条に「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない」とあり、その第4項に「教科用図書及び第二項に規定する教材以外の教材で、有益適切なものは、これを使用することができる」とある。通称「副読本」と称される教材は、これに該当するものであり、多くの区市町村では、郷土の自然・歴史等を紹介する副読本を作成している。

三宅島においても、三宅村教育委員会が『わたしたちの三宅島』と題する副読本（図3を参照）を発刊し、小学生の郷土教育に活用している。副読本は7章より構成されており、①わたしたちの三宅島、②島の人びとの仕事、③くらしのうつりかわり、④安全なくらし、⑤けんこうなくらし、⑥島の発てんにつくした人びと、⑦わたしたちの東京都（原文に準じた表記としている）など、身近な暮らしに関わる地域情報を多く示し、自らが地域に関心を寄せることができるように工夫が講じられている。地域の特徴的な記述としては、噴火災害について記載している



図2 三宅島観光副読本の表紙



図3 三宅島教育委員会作成の副読本
-わたしたちの三宅島-



図4 沖縄県観光学習教材 (第13版)

ことと、東京都の他の島々との比較の中で三宅島の特徴として野鳥の楽園を示しているものの、観光産業を項目立てて示していない。

観光に特化した副読本の発刊の現状

観光立国宣言以降、わが国の観光がクローズアップされてきたなかで、子どもを対象とした観光への理解を求めるための「観光副読本」は、沖縄県、宮城県、宮崎県、京都市、長崎市等の限定された地域において発行されている。

沖縄県では、観光立県を標榜していることもあり、観光立国推進基本計画において、地域の魅力や観光の意義等に関する児童の理解を増進することの必要性が示されたことを受けて、観光を通して沖縄の歴史・文化・自然などを学べる教材として『沖縄県観光学習教材』(図4を参照)を発行し平成18年度より沖縄県内全小学校(4年生)に無料配布している。現

在、第13版(2021年3月発行)と改訂を重ねるとともに、沖縄観光の推進を中心となって進めている(一社)沖縄観光コンベンションビューローが観光出前授業等を実施している。

沖縄県の取り組みの2年前より、宮崎県では『宮崎観光副読本・わたしたちにできることってなあに? -わたしたちの観光・リゾート宮崎(平成16年5月)』を発刊し、国際会議、スポーツランド、神話・伝説・自然環境、人情等の地域特性に加えて、ホテビタリティや観光に関わる仕事等を紹介している。また、宮城県では、『観光副読本・宮城で観光を学ぼう -観光のススメ(平成22年3月)』を発刊した翌年、中学生以上を対象とした『観光副読本・観光のススメ(平成23年3月)』を制作するとともに、教育旅行を誘致するためのガイドブックの制作・プログラムの開発等にも積極的に取り組んでいる(図5・6を参照)。

市町村及び広域圏での取り組みとしては、京都市が京都観光の意義やおもてなしの心を学ぶための観光副読本として『そうだったんだ! 京都観光~京都にとって「観光」が大切な理由(平成23年3月)』、長崎市では『長崎のまちを歩いて、見て、聞いて、知る! さるくキッズ-小学生用副読本(発行日記載なし)』を発行している。また、広域圏での取り組みとしては、天草地域(天草市・上天草市・苓北町)で、天草のことをもっと知るための観光副読本として『もっと知ろう! 自慢しよう! みんなの町-伝えよう 宝島・天草(平成21年3月)』(図7を参照)、京都府丹後土木事務所の『天橋立学ぶっく-みんなで守り残そう 世界の宝物(平成21年1月)』等が見られる。また、近年では、鹿児島県の近代遺産をテーマとする『かごしまタイムトラベル-日本の近代化の歴史を訪ねる旅(2020年3月)』や、『藍のふるさと阿波~日本中を染め上げた至高の青を訪ねて(令和2年度)』、『北区を愛し、北区に住み、世界をリードした渋沢栄一翁(2021年9月)』(図8を参照)等、日本遺産や世界遺産に関連する地域の特徴的なテーマ、地域が輩出した偉人に焦点をあてた副読本が見られるようになっている。



図5 平成22年3月宮城県発行 宮城で観光を学ぼう



図6 平成23年3月宮城県発行 観光のススメ

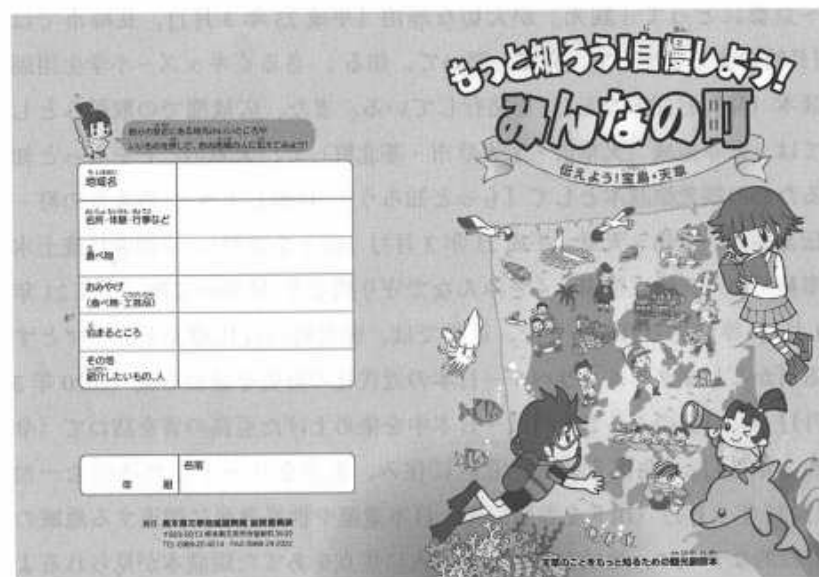


図7 広域で取り組んだ天草地域の観光副読本



図8 北区教育委員会発行の流沢栄一をテーマにした小学生用と中学生用の副読本

東京都内における観光に関連する副読本については、都立高校の地理歴史科用に編集された『江戸から東京へ（東京都教育委員会発刊）』、流沢栄一をテーマとした小・中学生を対象とした副読本は見られるものの、観光を主要なテーマとした副読本は発行されていないのが現状である。

小学生向けの観光副読本制作の目的と全体構成の検討

2020年9月、筆者らは、地域をより深くするための観光読本・三宅島の素顔を紹介した『三宅島観光白書 三宅島学』を発行した。同書では読者層のひとつとして中学性や高校生をはじめとした子どもたちを想定していたが、さらに読者層をひろげ小学生から郷土の観光の現状と将来への展望に興味・関心を寄せてもらうこと、都内において小学生を対象とした観光副読本が発行されていないことからその先導的な取り組みとすることを目的として、三宅島観光副読本づくりに取り組むこととした。

表1 三宅島観光副読本の全体構成

章構成	内容	備考
表紙	・三宅島の全体図から三宅島は山手線とほぼ同じ大きさ ◆はじめに+目次+登場人物紹介	
第1章	1 三宅島の観光の現状 □どれだけの観光客が三宅島にきている? □離島ブームって? □2000年の噴火の影響 □他の島々の状況はどうなっているの? □三宅島への交通手段 □視野を広げて…日本の観光・東京の観光を学ぼう!!	※観光客の推移グラフ ※離島前後の変化グラフ ※9つの島の位置づけのグラフ ※交通手段別入込客数
第2章	2 観光って何だろう □なぜ、人は旅をするのでしょうか? □観光による意義・効果 「観光」のいろいろな形態/観光の魅力とは? 魅力的な地域になるためには/観光に関わる仕事	【インタビュー】 ■宿泊(民宿)の仕事に携わる人の話 ■地域を案内するガイドさんの話
第3章	3 三宅島の魅力 □私たちの島・三宅島のことを知ろう!! 【特徴①】エコツーリズム～環境と生態系に恵まれた島 □巨樹/バードウォッチング/ダイビング/釣り 【特徴②】アースデザイン～島全体が火山博物館 □火山の噴火とジオマップ □三宅島の噴火の歴史 【特徴③】シビックプライド～暮らしと文化 □式内社12社/三宅島のお祭り 【特徴④】危機管理～火山との共生 □噴火の経験をしている三宅島だからこその特徴 □防災十カ条 【特徴⑤】完結と連携～島では特性と発展の可能性 □島ならではの特性/□3つの連携 三宅島の新しい「お宝」を探しに行こう!! □海岸線を探検してみよう □ジオマップをもってジオサインをめぐるみよう □林道沿いをめぐるみよう □郷土博物館を訪ねてみよう	※Q&A形式で ※エコツーリズムの解説 ※噴火とその時に誕生した山や消失した湖などをつなぐ問題 【インタビュー】 ■住職のお話 ※防災マップ 日頃からの備えが大切!!
第4章	4 これからの三宅島 □火山とともに生きる島づくり □視野を広げて…東京都の観光ではどのように島の観光を考えているか 三宅島を元気に島にするためには?? □魅力的な島には人はやってくる…… □地域の中を「お宝」を大切にしよう □美しい三宅島をミライに残そう	【インタビュー】 ■村長さんの話 ■観光協会さんの話
第5章	5 私たちと観光 □おもてなしの心って??-ホスピタリティの重要性 □私たちにできること	※ワークシート …私たちにもできることをまとめておこう
巻末	メッセージ集…子どもたちへのメッセージ	

先行して発刊されている前述の観光副読本を参照し参考とするとともに、読者層により近い本学経済学部3年生の学生(大下ゼミ生)を検討メンバーに加えて、観光副読本の構成検討から始めることとした。多くの先行事例では、「観光とは何か?」が冒頭に解説されているのに対し、三宅島においては、2000年の噴火による影響から観光客の来訪が戻っていない現状をグラフで示すことにより、三宅島観光の現状をより感じてほしいと願う構成とした。具体的には、表1に示す通りであり、三宅島の観光客の現状の後に、観光とは何かを解説、三宅島を訪れる観光客の実態と三宅島の魅力を示した上で、これからの三宅島の方向性を示すこととした。また、最後に、三宅島の今後に向けて自分たちは何ができるかを問う構成とすることとした。

子ども達に興味・関心を寄せてもらうための工夫

小学生に興味・関心を寄せてもらうための先行事例の工夫・手法について検討したところ、次の5つの工夫を講じられていることが明らかとなった(図9・10:分析作業の様子と検討成果)。

- ①文字を工夫する:学習指導要綱等と照合して判読可能な漢字に限定する、あるいはルビをふる。文字は極力大きくする。
- ②デザイン上を工夫する:グラフや写真・絵を多用してわかりやすく、かつ視覚的に表現する。タイトル(章見出し)は特徴的(例えば黒板風)に表現する。
- ③興味を惹くよう工夫する:オリジナルキャラクターを登場させ、イラストによる会話調で解説を加える。場合によれば4コマ漫画で解説する。また、題目を覚えやすいように工夫する。
- ④理解を深めるよう工夫する:章ごとにまとめを設ける、長い解説はしない、メモがかけられるように余白を設けておく、できれば章ごとにまとめをしておく。地域で実際に活動している人の声を紹介する。
- ⑤クイズを取り入れる:遊びながら学べるようQ&A形式、クイズ形式



図9 先行事例を参考にして三宅島観光副読本の構成を検討中の作業風景



図10 子ども達に伝わりやすいための工夫について検討している風景

などを組み込む。また、ゲーム感覚で学べる付録（しま巡りすごろく）を付ける。

現地での取材・インタビューの実施

検討した観光副読本の構成、興味・関心を寄せてもらうための工夫を盛り込んだドラフト案を作成し、2020年9月に三宅島を訪問、三宅村役場にて村長、副村長、教育長並びに担当課長に観光副読本（当時の仮題は「（仮）三宅島キッズ観光探検隊手引書－私たちが知りたい三宅島観光・みんなに知ってほしい三宅島観光」）の企画・構成についてプレゼンし了解を得た。

また、企画会議の後、子どもたちが観光への理解を深められるように企画したインタビューについて、村長を含む表2に示す5名の方にインタビューを実施するとともに、子どもたちへのメッセージをいただき、観光副読本の巻末に掲載することとした（図11・12・13・14参照）。

表2 インタビューの対象者とインタビュー内容

インタビュー対象者	インタビューの内容
【宿泊（民宿）の仕事に携わる人の声】 いけ吉の木村さん	○楽しいところと苦勞されているところを教えてください。 ○ご家族でUターンされた理由は？…いまどうですか？
【地域を案内するガイドさんの声】 ガイドの菊地さん ※写真中央	○案内していて楽しいところは？ ○案内した人のどんな言葉がうれしいですか？
【住職のお話】 善陽寺・山本住職 ※写真左	○暮らし・歴史・文化についてのお話？ ○三宅島の文化面での特徴について？
【村長さんのお話】 櫻田村長 ※写真右	○島づくりについて、目指している目標は？ ○これからの三宅島の観光について？
【観光協会のお話】 平野さん	○どのようなお客さまを呼びたいと考えているか？ ○三宅島をどのようにPR・プロモーションしようとしているか？



図11 村長へのインタビュー 図12 ガイドさんへのインタビュー 図13 住職へのインタビュー



図14 インタビューを通じていただいた子ども達へのメッセージ

三宅島★島めぐりすごろくの作成

三宅島観光の知識の習得のための副読本ではあるが、学んだ知識を再確認すること、小学生の行動範囲を振り返ると、自分の住んでいる地域と小学校周辺以外の地域についての知識は乏しいことを踏まえて、三宅島全体を巡るすごろくにより遊びながら学べるツールを開発し、副読本の付録として巻末に掲載することを提案し、三宅村役場の村長をはじめとする関係

者の共感を得ることができた。

帰京後に、島を訪れる交通手段や地域観光情報の発信基地となる三宅島観光協会、各種の観光名勝、地域の特徴を踏まえたゲーム上のイベント、今後の三宅島の誘因となるジオパークやパワースポットを巡ることによるカードの収集などを組み込んで、友人や家族で遊べるボード形式のすごろく『三宅島★しま巡りすごろく』のルールづくりとデザインに取り組んだ(図15参照)。

具体的には、島に行く交通手段は、飛行機と船とし、サイコロに目により決定することとした。また、船の場合は、再度、サイコロを振り、出たサイコロの目により3つの港のどこに寄港するかが決定する。これは実際に三宅島に船により訪れる際、直前まで寄港地がわからないため、リアリティを追求したルールとなっている。ジオパークやパワースポットのマークのあるコマに止まるとカードが入手でき、決められた枚数を取得すれば

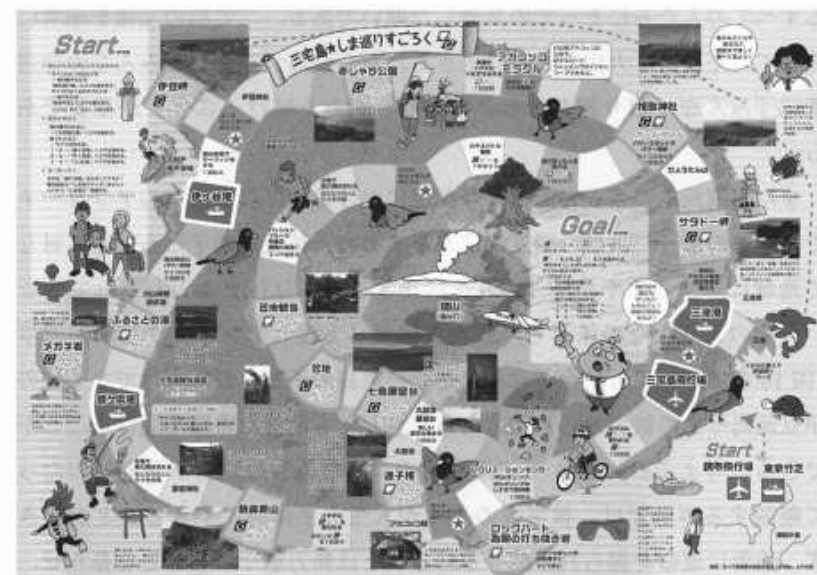


図15 遊びながら学べるように工夫したしま巡りすごろくの盤面デザイン

ゲームが終了するというルールとし、盤面状で島内を何回か巡ることにより、楽しみながら学べることになることを想定した形式とした。

副読本の三宅島での活用

本副読本は三宅島の小学生、中学生、小中学校の教職員すべてに配布された。東京都三宅村教育委員会では、三宅島の子どもたちへの教育に関する主要施策として地域の特性を活かした教育の充実に力を入れている。このなかには火山などの自然科学の学習を取り入れた教育課程の編成や郷土理解学習の推進などが含まれている（三宅村教育委員会、2021）。このような三宅村教育委員会の子どもたちに期待する教育の方向性を考慮すると、本副読本の活用においては主に郷土理解学習などの授業で活用されることで子どもたちが自分たちの育った三宅島の魅力を見つめ直すきっかけとなり、三宅島で生まれ育ったことを誇りに持てるようになることを期待している。「三宅島の記憶を未来に残そう」と願う気持ちは三宅島に関わるすべての人たちにとっての共通した願いである。三宅島の記憶を未来に残していくには「火山とともに生きる、新たな島づくり」をみんなの合言葉に「みんなで取り組むこと」と「取り組みを続けること」が重要である。

また本副読本の意義として、わが国における被災者支援策のアプローチでは本書のように地域の観光副読本をまとめ、被災地の子どもたちに対して地域に対する夢や希望、誇りを創出する試みはほとんど行われていない。そのようななか筆者らの新たな被災者支援のアプローチは新聞記事(図16を参照)でも紹介されるなど、三宅島の子どもたちだけでなく他の伊豆諸島や他の被災地の子どもたちに対しても期待や希望を届けることができると考える。2000年三宅島噴火のような災害の被害が長期にわたって継続する事例では、被災者の多くが人生を主体的に生きることができず、他者に運命を握られ、翻弄されることは無力感やむなしさを募らせ、心の安定を喪失させやすいことが明らかになっている(大森, 2019)。観

東京七島新聞

[illegible]

三宅島観光白書

「三宅島学」発刊

光日記「三宅島」三宅島観光の特集、第6章日本の観光の取り組む場合



龍光自書「三宅島字」と副読本

行(参考資料1)・2)の
し、アガ4版160頁
に収められている。
観光地帯のほかに
「その地域の歴史や
地質などについてきた履
歴、産業、観光の現状、
観光地帯など、全体を
網羅し、わかりやすく
紹介した、まさに「地
域版観光書」」。

また、別冊「観光副
読本」私が知らない知
名観光地、みんなに知
ってほしい三毛鳥観
光(A4版4頁100
円)も同時発売。

◆筆名一覧◆
太下 茂氏 帝京大
経済学部経営学学科
大森昌氏 帝京大
外国語部外国語学科

図 16 取組を紹介された新聞記事（東京七島新聞；2021 年 5 月 8 日発行 1 面）

光は地域に経済的な効果をもたらすことが期待されるだけでなく、地域での働く場づくり、環境や景観づくり、伝統文化の継承、子どものふるさと意識を高めるなど魅力ある島づくりの目標ともなる大切な取り組みとなることが推察される。本副読本の活用をきっかけに、三宅島の子どもたちが地域の魅力や誇りを感じ、元気を取り戻すことでそれを起点に地域全体の活性化や三宅島住民全体への日常における生きがいや将来に対する希望につながることを期待したい。

今後の課題として筆者らが提案したグランドデザインをどのように実現

していくか、三宅村の総合計画の基本方針である「火山とともに生きる、新たな島づくり」を目指し、ここからさらに三宅村役場や住民と連携や協議し、その実現をしていきたいと考えている。

謝辞：本研究の実施においては、東京都三宅村役場、東京都三宅村教育委員会、東京都三宅支庁、一般社団法人三宅島観光協会、東京都産業労働局観光部等、皆様のご支援とご協力を賜り遂行することができました。また本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号19k03212 研究代表者：大森哲至）からの支援を受けました。心より感謝申し上げます。

引用文献

- 大森哲至（2010）繰り返される災害下での精神健康の問題 —2000年三宅島雄山噴火後の坪田地区住民の精神健康について— 実験社会心理学研究、第50巻1号、P.60-75.
- Omori, Tetsushi, Fujimori, Tatsuo. (2010) Recurring Natural disaster and their psychological influence on the survivors. The Yokohama Journal of Social Sciences, Vol.15. (4) P.117-128
- 大森哲至・藤森立男（2011）繰り返される自然災害と被災者の長期的な精神健康の問題 —2000年三宅島雄山噴火後の坪田地区住民の精神健康について— 応用心理学研究 36(2) P.69-78.
- Omori, Tetsushi. (2012: a) Recurring Natural disaster and its influence on the Mental Health of Older Adults. The Yokohama Journal of Social Sciences, Vol.16. (4) P.109-121
- Omori, Tetsushi. (2012: b) The Recurring Natural disaster and the Problem of PTSD among Older Adults. The Yokohama Journal of Social Sciences, Vol.17. (3) P.63-72

- 大森哲至（2019）継続する自然災害の被害と被災者の心理的影響 —2000年三宅島噴火の被災者との面接調査からの検討— 帝京大学外国語外国文化 第10号 P.49-74
- 大森哲至・田宮憲（2020）継続する自然災害における高齢者の復興曲線に関する研究 —2000年三宅島噴火で被災した高齢者のライフイベント調査からの検討— 帝京大学短期大学紀要（40）P.15-30
- 大森哲至・田宮憲・岩井美路子（2020）継続する自然災害の高齢者の精神健康への影響 —2000年三宅島噴火から13年後の高齢者の精神健康調査から— 帝京大学外国語外国文化 第11号 P.29-50
- 大森哲至（2021）継続する自然災害による被災者への長期的影響 —2000年三宅島噴火から20年後の被災者の精神健康調査から— 日本応用心理学会第87回大会 プログラム P.52
- 大森哲至・大下茂（印刷中）地域の観光白書を用いた被災者支援の新しいアプローチからの実践 帝京大学外国語外国文化 第13号
- 大下茂・大森哲至（2020）三宅島観光白書 三宅島学 地域をより深くするための観光読本・三宅島の素顔 —これまでの三宅島、そしてこれからの三宅島— ミライカナイ出版
- 三宅村教育委員会（令和2年4月）『わたしたちの三宅島』
- 沖縄県・（一財）沖縄観光コンベンションビューロー・沖縄県観光教育研究会（令和3年3月）『沖縄県観光学習教材（第13版）』
- 宮崎県・財団法人みやざき観光コンベンション協会（平成16年5月）、『宮崎観光副読本・わたしたちにできることってなあに？—わたしたちの観光・リゾート宮崎』
- 宮城県（平成22年3月）『観光副読本・宮城で観光を学ぼう—観光のススメ』
- 宮城県（平成23年3月）『観光副読本・観光のススメ』
- 公益社団法人宮城県観光情報発信センター・宮城県（2021年3月）『宮城県教育旅行ガイドブック』

京都市（平成23年3月）『そうだったんだ！ 京都観光～京都にとって
「観光」が大切な理由』

長崎市（発行日記載なし）『長崎のまちを歩いて、見て、聞いて、知
る！ さるくキッズ～小学生用副読本』

熊本県天草地域振興局（平成21年3月）『もっと知ろう！ 自慢しよ
う！ みんなの町～伝えよう 宝島・天草』

京都府丹後土木事務所（平成21年1月）『天橋立学ぶっく～みんなで守り
残そう 世界の宝物』

鹿児島県（2020年3月）『かごしまタイムトラベル～日本の近代化の歴史
を訪ねる旅』

藍のふるさと阿波魅力発信協議会・藍住町教育委員会（令和2年度）『〈私
たちの町の日本遺産〉 藍のふるさと阿波～日本中を染め上げた至高
の青を訪ねて～』

北区教育委員会（2021年9月）『北区を愛し、北区に住み、世界をリード
した渋沢栄一翁』、小学校3年～6年／中学校1年～3年

東京都教育委員会（2016年3月）『（都立高等学校 地理歴史科用）江戸か
ら東京へ』